

ベルクソンによるプロティノス哲学の受容

——なるものと多なるものの関係をめぐって——

村上 龍

本稿の目的は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（一八五九―一九四一年）の講義録中で示されるプロティノス解釈に注目しながら、彼の哲学の形成に際してプロティノスが有した意義を明らかにすることである（¹）。

ベルクソンが古代ギリシヤ哲学の「総合」者としてプロティノスを重視したことや（C: 1626）、これに「共感」を覚えていたらしいことは（M: 1192）、書簡や対話の記録等を通じ知られるところである（²）。このため、思想内容上の類似ないし差異に注目する、そうした意味での比較研究もこれまでになされてきた（³）。しかしながら、ベルクソン本人のプロティノス観に照準して、彼がプロティノス哲学をどう理解し、これを自身の哲学といかに関連づけたかを具体的に追求しようとすれば、従来、資料のうえで限界があった。生前公刊されたベルクソンの著作は総じて、先行の哲学史のまとまった読解をほとんど含まず、プロティノスの場合も例外ではない。彼は年代順に、「夢」（一九〇一年）（E.S. 887）、「形而上学序説」（一九〇三年）（P.M. 1424-1425）、第三主著『創造的進化』（一九〇七年）（E.C. 637, 673, 761, 767-768, 770, 790, 792, 793-794）、「変化の知覚」（一九〇一年）（P.M. 1374, 1375）、そして最後の主著『道徳と宗教の二源泉』（一九三二年）（D.S. 1161-1163）でプロティノスに触れているが、これら数少ない言及も断片的なものでしかない。

ところが近年、リセや高等師範学校、コレージュ・ド・フランス等におけるベルクソンの講義の記録が次々と公にされている⁽⁴⁾。先述の資料上の制約は、これら講義録によって乗りこえられるだろう。というのも、そこにはプロティノスに関し、断片的たるに留まらぬまとまった読解を提示する講義が複数収められているからである。しかも重要なのは、それが一九世紀末の講義だという点である。先に、断片的ながらもプロティノスに触れるベルクソンの著作を列挙したが、一見して分かる通り、これらはすべて二〇世紀初頭以降の論考である。言及の頻度が関心の高まりを反映すると考えてよいならば、ベルクソニスムにとつてのプロティノスの意義を見定めんとして、その直前の時期に講義で示された解釈をたずねることの有効性は認められよう⁽⁵⁾。

以下、第一節では四つの講義の記録を年代順に検討し、ベルクソンのプロティノス解釈を確認する。一連の検討を通じて我々は、ベルクソンが一貫した視座にたつ解釈をしいに確立するのに立ちあうことになる。第二節では、その解釈とベルクソン自身の哲学との関連を、プロティノスに関する諸講義以後最初に出版された二〇世紀初頭の主著であり、全著作中、プロティノスにもっとも多く言及する論考でもある『創造的進化』におもに抛りつつ考察する。考察の結果、ベルクソンがプロティノスの視点の反転を経て、自身にとつてもっとも枢要な「持続」概念を深めたことが明らかとなる。

一 ベルクソンのプロティノス解釈

ここでは、一九世紀末のリセや高等師範学校等における諸々の講義を収めた『ベルクソン講義録』全四巻から、「アレクサンドライア学派についての講義」(一八八四年)、「靈魂の諸理論」(一八九四年)、「ギリシヤ哲学」(一八九四・一八九五年)、そして質、量ともにもっとも重要な「プロティノスについての講義」(一八九八年)を順に検討する⁽⁶⁾。

一・一 仲介者を経た一と多の調停―「アレクサンドリア学派についての講義」

最初に組上へあげるのは、クレルモン＝フェランのリセ、ブルーレーズ・パスカル校において一八八四年に、ということは何女作『意識に直接与えられたものについての試論』（一八八九年）の刊行以前に、行なわれたと推定される講義の記録である。題名にはアレクサンドリア学派の名が掲げられているが、六頁という限られた紙幅のなかで取りあげられるのは、もっぱらプロテイノスである。

ベルクソンは、プロテイノスの言う「一者」が「思考」や「意欲」、「存在」を超えたものであることを述べたうえで（C-IV. 147-148）、まずはそこからの「発出」の過程を（C-IV. 149）、それが「論理的」な「価値の序列」であって時間的順序でない点に注意を促しながら（C-IV. 148）、論じろ。

一者はいかにして諸事物を産んだのだろうか。完全な統一や絶対的完成から、我々の生きる多重的で不完全な世界が生じることはいかにある。この絶対的完成とこの不完全とのあいだには、諸々の仲介者がなくてはならない。実際、一者から必然的なしかたで生じるもの、それは精神、もしくはより正確に言えば、諸イデアの座としての知性であり、プラトンが我々に語るところの世界、すなわち数学的にして形而上学的な諸々の一般的イデアの世界であって、これこそが始原の一者からの最初の流出である。だが、こんどは知性が屈折して、プロテイノスが世界靈魂とよぶものを産み、これが万物に、我々の生きる世界にまでも浸透する。我々が質料とよぶのは、この靈魂がゆるみ、分割され、我々に対し感性的なしかたで現れたものにほかならない。このように、一者、知性、世界靈魂、これらは存在の三つの段階であり、三つの原理的なものである（C-IV. 148）。

時間的な継起ではなく、あくまで論理上の価値の序列として、「一者」から「諸イデアの座」としての「知性」が「流出」し、

次に「知性」の「屈折」により「世界靈魂」が生じ、最後に「世界靈魂」が「ゆるみ、分割され」て「感性的」な「質料」にいたる。そうした発出の過程を、ベルクソンはここで、「知性」ならびに「世界靈魂」の「仲介者」としての役割をいくぶん強調しながら、すなわち、「完全な統一性」もしくは「絶対的完成」であるところの「一者」と、「質料」あるいは「多重的で不完全」な「感性的」世界との媒介の必要を強調しながら概観しているのである。こうして発出を論じたのち、ベルクソンは「一者への「回帰」に目を転じ、「学知 (science)」を通じて「諸イデアの世界」すなわち「知性」へ、次いで「学知を超えた」「法悦」によって「一者」へと高まりゆく過程にいく簡単に触れて (C-IV. 149)、プロティノス哲学の概説を終える。

このように、プロティノスの体系、とりわけその発出の局面をめぐって、知性および世界靈魂を「一者」と「質料性」との、すなわちゆるみや分割をはらんだ感性界との仲介者とみなし、これらを介した一と多の調停の努力を多少なりとも強調する点で、哲学的キャリアをいまだ歩みはじめていない時期にある本講義は、すでに注目に値する。

一・二 一なる知性界と多なる感性界の媒介——「靈魂の諸理論」

次いで、パリのリセ、アンリ四世校において一八九四年に、ということとは第二主著『物質と記憶』(一八九六年)刊行の二年前に、行なわれたらしい講義の記録を検討する。全七講からなる本講義は、心身問題を見据えながら、アリストテレスにはじまりライブニッツにいたるまで各回一人ずつ哲学者を取りあげ、各々の靈魂についての理論を講じるものである。講義全体のそうした特定の目的に応じて、プロティノスをあつかう第三講では、わずか六頁の紙幅のほぼすべてが発出の説明にあてられる。

ベルクソンによれば、「靈魂が身体のうちにあるのではなく、身体こそが靈魂のなかにある」というのがプロティノスの考えである (C-III. 214)。彼はその点を明らかにすべく、しだいに弱まりゆく光にもたとえられる発出の過程を、やはりそれが時間的な継起の關係でない点に注意を促しながら (C-III. 214-215)、参照する。

絶対的に単純な一者から多重的な一者ともよびうるものが、すなわち諸イデアの世界が派生する。しかし、純粹な諸イデアの座である知性は、いまだ感性的な諸事物からあまりに離れているため、これらを直接には産出しえない。ひとつの仲介者が必要である、つまり知性的な光を感性界へ伝える、あるいはむしろ、これを感性的な諸事物へと開花させる、そのような第三の原理が必要である。換言すれば、頂点がいまだ知性的でありながら、底辺は質料性であるような原理が必要なのだ。この原理は、アレクサンドリア学派の人々が世界靈魂とよぶものである。というのも、知性すなわちヌースが多数のイデアに開花すると同様に、この靈魂も、自らは分割されることなく多数の個別的靈魂へ屈折するからである。「中略」さて、一切の光「個別的靈魂」の源泉であるこの光源「世界靈魂」から離れるにつれて、これら光線が互いに遠ざかるにつれて、それらの輝きは弱まり、産まれつつある影がそれらのあいだにわたって入ってきて、ついには、これら光線は闇のなかに紛れてしまう。この闇夜、この影、はじめから存在していたわけではなく、光の否定としてしか存しえないこの暗さ、それこそが質料である (C-III. 214-215)。

「絶対的に単純な一者」から「諸イデアの座である知性」が「派生」し、次いで「世界靈魂」が、諸々の「個別的靈魂へ屈折」することで、「知性的な光」を「感性的な諸事物に開花させ」、最後に、「個別的靈魂」がその「光」を失って「質料」の「闇」に「紛れ」てしまう。プロテイノスにとつては身体こそが靈魂のうちにあると言いうるのは、質料を靈魂から派生させるその流出説のゆえなのである。

目をひかれるのは、ベルクソンが、「頂点がいまだ知性的でありながら、底辺は質料性である」、そのようにして二世界にまたがる「世界靈魂」に「仲介者」の役割を見出しつつ、媒介すべき乖離を、「多重的な一者」ともよばれる「諸イデアの世界」と「弱まり」「分割」された感性界もしくは「質料」とのあいだに認める点である⁽⁷⁾。「アレクサンドリア学派についての講義」では、彼は始源の一者と感性界ないし質料性とのあいだにこそ乖離を認めたために、世界靈魂のみならず知性にも仲介者

の役割を演じさせた。してみると、とくに発出の局面に即して先にもいくぶん強調されていた、仲介者を経た一と多の調停の努力が、一〇年の時を経て、ここでは知性界と感性界の乖離に即して論じなおされたのである。

一・三 ギリシャの二元論の克服―「ギリシャ哲学」

続いて、同じくアンリ四世校にて一八九四―一八九五年に、したがって「靈魂の諸理論」と同時期に、行なわれたとおぼしき講義の記録を検討する。プロティノスが登場するのは、ギリシャ哲学を通覧する全六講のうち「アレクサンドリア学派」と題された最終講であり、例のごとく、一〇頁強の紙幅のほぼすべてにわたって、ベルクソンはプロティノスの解説に終始する。ギリシャ哲学の歴史を見わたす講義全体の目的によるものか、ここでは、プロティノスの歴史的な位置づけがとくに強調される。

その位置は、プロティノス哲学それ自体の解説に先だち、講義の冒頭で定められる (C-IV. 137)。ベルクソンによれば、「多」と一、質料と形相の二元論」にとらわれたギリシャ哲学は、なごらく統一的な神と多なる諸事物とを関係づけられなかった。プラトンは「知性界」すなわち「諸イデアの世界」を構成する一方、「無秩序と分割の要素」たる「質料」をその外に放置したせいで、結局は神と諸事物をおり合わせることができなかった。アリストテレスは、「質料」を「形相」もしくは「イデア」に浸透させることにより、万物から「思考の思考」としての神の「統一」へと「連続」的に上昇する「運動」を描いたが、そのためにかえって、このような「つねに自らにむけて集中する」神的統一から多なる諸事物へ降るすべを失った。一見、神と諸事物をおり合わせえたかのようにみえるストア派も、実は、神から「その本質であるはずの統一」を奪い、これを諸事物の列に加えたのにすぎない。プロティノスこそが、「プラトン哲学」の独自の「解釈」としての自身の体系を通じて、ギリシャ哲学史上はじめて、統一的な神から諸事物を「必然的なしかたで演繹」し、前者から後者へ降ることに成功したのである。ギリシャ哲学の出口にプロティノスを位置づけるここでの哲学史理解は、とりわけ発出の局面をめぐって一なる知性界と多なる感性

界との媒介の努力を強調する、先に読みとれた解釈にも沿うものと言える。

こうして歴史的な位置を確認したあとで、ようやくプロティノス哲学の概要が示されるのだが、本講義の場合、この部分には目をひく記述はない。ベルクソンは、プロティノスの神つまり一者が「思考」や「存在」、「意志」等を超えることを述べたのち (C-IV, 138-140)、「屈折するにつれて弱まり、暗くなる」「発出」の過程を、それが時間的ならぬ「論理的な序列」、あるいは「上位のもの」と下位のもの」との「位階の関係」である点に注意を喚起しながら説明する (C-IV, 140-144)。次いで、「帰」の諸段階が、すなわち、まず「肉体の制御」をこととする倫理的な諸々の「徳」が、第二に、アリストテレス流の「理論的、推論的な徳」ないしはプラトン流の「弁証法」を通じた、諸イデアの「観想」が、最後に神との「親密な結合」である「法悦」が、順に語られる (C-IV, 144-146)。

このように「ギリシャ哲学」では、プロティノス哲学の概説それ自体には目をひかれる点がなく、先に読みとれた解釈、すなわち、おもに発出の局面に即して、二世界にまたがる仲介者を経た知性界と感性界の媒介の努力をいくぶん強調する解釈も、そこでは後景に退いている。だが、プラトン哲学の解釈としての自らの体系を通じて、ギリシャ哲学をながらく悩ませた一と多の対立をプロティノスが克服し、神的統一から諸事物への降下にはじめて成功したとする歴史的評価は、たしかに先の解釈を踏まえたものとみられる。

一・四 永遠から時間および空間への移行―「プロティノスについての講義」

最後に検討するのは、高等師範学校において一八九八・一八九九年に、つまり第二主著『物質と記憶』と第三主著『創造的進化』とのさまざまな時期に、行なわれたと推定される講義の記録である。六〇頁強にもおよぶ本講義でベルクソンは、先行の諸講義からも読みとれた解釈をいよいよ自覚的に前面へ押し出すとともに、これをいっそう発展させている。

「靈魂の諸理論」や「ギリシャ哲学」と異なり、講義の性格を制約する特定の目的を連想させないその題名に鑑みれば、本

講義はプロティノス哲学全体の偏りなき要約であってしかるべきだろう。ところがベルクソンは冒頭部で、プロティノス哲学の「中心的部分」が「靈魂の理論」にあることを述べ（C-IV.29）、講義の研究課題をもつばこれにしぼる。なぜならば、「一者」、「不可分」な「諸イデアの多性」、ならびに「頂点」が「イデア」にして「底辺」は「質料」である「靈魂」（C-IV.32）、の三つの原理を漸次的な「減退」によって結ぶプロティノスの流出説は（C-IV.34）、「諸イデアをとらえ、多数化、希釈して諸事物にする」世界靈魂を介して（C-IV.50）、「一者」と「諸イデア」とで構成される「知性界」から「感性界」へ「移行」する試み以外のなものでもないからである（C-IV.32）。そしてベルクソンによれば、このような「先行者らにあつて伏在していた二元論から解放されるための努力」にこそ、プロティノスの「大いなる独自性」がある（C-IV.33）。とすればここでは、二世界にまたがる仲介者を経た一なる知性界と多なる感性界との媒介の努力を、とくに発出の局面をめぐって強調する最初期より萌す着眼と、そのプロティノスを二元性にとらわれたギリシヤ哲学史の出口に位置づける「ギリシヤ哲学」での歴史理解とが、自覺的に前面に押しだされたとと言える。

しかしながら本講義は、すでに萌す着眼を自覺的に反復するのに留まらず、そこに新たな観点をつけ加えてもいる。そのことは、プロティノスとプラトンの関係を論じる箇所をみれば明らかである。

「ギリシヤ哲学」でも触れられていたように、プロティノスの体系にはプラトン哲学の解釈としての側面がある。ところでベルクソンによれば、「プラトンの諸々の対話編には、分かれたるべき二つの部分がある」（C-IV.36）。一方は、「相矛盾する諸々の質の集合」たる「感覺」を切りわけ、その背後に「諸イデアを配列する」「弁証法」であり、他方は「神話」、それもプラトンにとって「本質的」だと彼の考える、「靈魂の生成」を「主題」とした神話である（C-IV.36-37）⁽⁸⁾。とすればプラトン哲学は、一方で「弁証法」すなわち「学知」を通じ「諸事物」から「イデア」へ、とりわけ「善」のそれへと「さかのぼり」、他方で靈魂の生成に関する神話によって「善」から「諸事物」へ「降る」ものであり、ここには潜在的に「発出」と「回帰」が含まれている（C-IV.38）⁽⁹⁾。それゆえプロティノスは、発出と回帰の体系によって「プラトン哲学をその全体において把握しな

「おし」たのにはかならず (C-IV.39)、プロティノスの発出も「プラトンの諸々の神話の形而上学的な翻訳」以外ではなく (C-IV.50)。

では、形而上学的翻訳としてのプロティノスの発出は、その原文、すなわち靈魂の生成をめぐるプラトンの神話といかなる点で異なるのか。神話という言説はその形式上、「それが物語ることを時間のなかで分割」せざるをえない (C-IV.40) (9)。これに対しプロティノスは、靈魂の生成という、あるいは世界靈魂を介した知性界から感性界への移行という同じ問題を、特異な因果性のもとに語る。

しかし、因果性は二つのかたちをとらうる、時間のなかでの発生が問題であるか、論理的で非時間的な因果性が問題であるかに応じて、すなわち、ある存在が別の存在を産出するのか、諸々の帰結がその原理から生じるのかに依拠して。前者の過程には継起が含まれるが、後者には時間は含まれない。―さて、プロティノスにおいて問題となる因果性は、そのいずれでもない。そうではなく、原因は時間のそこにあつて、結果が時間のなかにあるのだ。「中略」原因は一にして不可分だが、結果は多性そのものと、そしてまた、原因はいかなる点でも、いかなる程度においても、それが産む多性には与らないのだと言わねばならなく (C-IV.50)。

「不可分」な「一」から「多性」への流出は、「時間のなかでの発生」ではなく、さらには「論理的で非時間的」な「原理」と「帰結」の関係でさええない。二世界にまたがる仲介者の存在ゆえに、「原因」は「一にして不可分」なるものとして「時間のそこ」にあるが「多性そのもの」である「結果が時間のなかにある」、そうした特異な因果関係が実現されるのであり、この点こそ、形而上学的翻訳たるゆえんがある。

さて、プロティノスの発出をプラトン哲学と比較する上の箇所、注目すべきは次の点である。ベルクソンは、時間的継起

ならぬ位階の序列である点に最初以来注意を促しつつけた発出の諸段階を、時間のそとなるものと時間のうちなるものとの関係としてあらためて論じている。このように、分割と多性の原理としての時間に着目しながら、靈魂を介した知性界から感性界への移行を非時間性から時間性へのそれとみなす観点は、先行の諸講義にはみられなかったものである。実際、本講義中では、しばしば知性界に「永遠」の語があてられ (C-IV: 32, 40, 41, 57, 58, 66, 70, 77, 78) 、二世界を媒介する世界靈魂がとくに「空間と時間のなかでの、諸イデアの乗りもの」と呼ばれ (C-IV: 49) 、また資料は「時間と空間における無際限なもの」と定義される (C-IV: 47) (三)。

以上、四つの講義を年代順に検討してきた。一連の検討を通じて我々は、一九世紀末にベルクソンが、おもに発出の局面に即して、一貫した視座からプロティノス解釈を次第に確立するのを見た。彼は一八八四年の講義ですでに、仲介者をたてて一と多を調停せんとするプロティノスの努力をいくぶん強調していた。次いで一八九四年には、その調停の努力が、知性界と感性界の乖離という問題設定のなかで論じなおされる。そして一八九八年になると、この着眼がいよいよ前面に押し込まれるとともに、二世界にまたがる仲介者を経た一なる知性界から多なる感性界への移行は、不可分な永遠から分割をはらんだ時間および空間への移行として、あらためて規定されるにいたった¹²⁾。

二 ベルクソンにとってのプロティノスの意義

二・一 プロティノスとの親近性―『創造的進化』

二・一・一 「延長と弛緩の関係」

ひるがえって、ベルクソンの二〇世紀の諸著作にみられるプロティノスへの言及を見なおせば、それらはたしかに、一九世

紀末に示された解釈を反映している。「時間」と「空間」のそとなる「諸イデアの世界」から「行動」の世界への靈魂の「落下」に言及した論文「夢」の一節 (E.S. 887)、「行動は観想の減退である」とのテーゼによってプロティノス哲学を集約的に表現する「形而上学序説」、「変化の知覚」および『道徳と宗教の二源泉』の記述 (P.M. 1424, 1374, D.S. 1163)、「ギリシヤ哲学の完成者としてプロティノスを重視する『形而上学序説』や『創造的進化』『道徳と宗教の二源泉』の諸頁 (P.M. 1425, E.C. 761, 767-768, D.S. 1161-1162)」、これらはみな講義録中の解釈に沿うものである。

そのなかで我々にとって重要なのは、ベルクソンがプロティノス哲学と自身のそれとの関連に言及する『創造的進化』の一節である。プロティノスをめぐる諸講義以後、最初に刊行された主著に、彼は次のような注記をさし挟んでいる。

より一般的に言えば、我々が本章で設ける「延長 (extension)」と「弛緩 (distension)」の関係は、ある面ではプロティノスが「…」想定するそれと、すなわち、彼が拡がり (étendue) を「…」その「根源的存在の」減退とし、これを「…」発出の最終的な諸段階の一つとみる際に想定する関係と似かよっている。とはいえ古代の哲学は、そのことからいかなる帰結が数学に関してもたらされるかに気づかなかった。というのもプロティノスは、プラトンと同じく、諸々の数学的本質を絶対的な現実にもつりあげたからである。とりわけ古代の哲学は、持続と延長とのまったく外的な類似に欺かれてしまった。前者を後者と同様にあつかい、変化を不動性の破損と、感性的なものを知性的なものの墮落とみなしたのである (E.C. 673)。

諸講義での解釈を踏まえてのことだろう、ここでもプロティノスの発出は、「不動」の知性界から時間的および空間的な「変化」する感性界への移行において理解されている。この学説は、第一に知性界のうちなる「数学的本質」を「絶対的な現実にもつりあげ」る点で、第二に、「持続」すなわち時間的なものと「拡がり」あるいは空間的なものとを感性界のうちでひとしくあつ

かう点で、誤っている。ただしベルクソンは、「拡がり」を「根源的存在」の「減退」の最終段階とする考えかたには、自らの設ける「延長と弛緩の関係」との親近性を認めるのである。

それゆえ、ベルクソンにとつてのプロティノスの意義を見定めるためには、この記述に導かれつつ、彼の言う「延長と弛緩の関係」が何であるかをみなければならぬ。

二・一・二 仲介者を経た持続から空間への移行

先の注記が付されているのは、処女作『意識に直接与えられたものについての試論』以来提唱してきた、内的時間としての「持続」概念を、ベルクソンが空間と関係づけようとする箇所であり、問題の「延長と弛緩の関係」もその努力に関わる。

『創造的進化』において「持続」は、「蓄積された経験」によって「たえず伸び、大きくなり、成熟する」「我々の人格」に典型的にみられるような(E.C. 499)、「ひとまとまりに「全体」をなす「過去」の、「現在への継続」として規定される(E.C. 498)。(13)。「最も内的に感じられる地点」にたつとき、我々はそのような「持続」に「もぐりこむ」わけだが、ベルクソンによれば、その際、過去の全体を「不可分」なまま現在へ「おし入れる」人格は「極限にまで緊張」する(E.C. 664-665)。さてベルクソンは、こうして「様々な部分」を「相互浸透」させながら「ひとつの切っ先に集中」する人格の持続の上方に、これら個々の意識がそこからの「減衰」でしかない(E.C. 696)、「いっそう緊張した「超意識」を想定する一方(E.C. 703, 716)、「緊張を緩め」た個々の人格が「相互に外在的なく千もの記憶」に「分散」しゆく(E.C. 665-666)、「その弛緩の坂をさらに降った先に、外的な拡がりを予想する。

だがしばらく、物質「質料」とはこれと同じ運動がより遠くへおし進められたものと、それゆえ物理的なものは単に心理的なものの反転だと想定してみよう。すると、精神は物質「質料」にいっそう判明な空間の表象を示唆されるや、空間のうちで大変くつろぎ、きわめて自然にそのなかで動きまわることが分かるだろう。この空間の表象を、精神は自らの身

に起こるかもしれないぬゆるみ (*letenje*)、すなわち自身の可能な脱緊張 \parallel 延長 (*extension*) について抱く感じのなかで、暗黙のうちにもついていた。「中略」他方、それゆえにまた、物質「質料」が精神の眼差しのもとで自らの物質性「質料性」をますます強めることも理解されよう。「中略」精神が純粹空間に関して形成する表象は、この運動が到達するであろう終端の図式にほかならない。「中略」このように、我々の幾何学の空間と諸事物の空間性とは、本質をおなじくする二項の相互的な作用反作用によつて「…」産みだされる。空間は我々が思い描くほど我々の本性と無縁でないし、物質「質料」も我々の知性や感覚が思うほど、完全に空間の中に拡がってはいない (E.C. 666-667)。

諸部分を相互浸透させて統一をなす内的持続の緊張がゆるめば、人格は分割へと傾く。外的な「拡がり」ないし物質(質料)は、緊張する内的持続のかかる「ゆるみ」を「より遠くへおし進め」たものにほかならず、「精神」もしくは「知性」が「ゆるみ」の「終端」に予想する、理想的極限としての「図式」こそは、空間、それも「幾何学」的空間である。外的な延長 (*extension*) は、実は内的な持続の弛緩、すなわち脱緊張 (*ex-tension*) でもあったのだ。このように、ベルクソンは『創造的進化』で、知性を空間の側にひき寄せつつ(は)、持続と拡がりの両極にまたがる「脱緊張 \parallel 延長」概念を介して、持続ないし時間と空間とを関係づける。くだんの「延長と弛緩の関係」とは、こうして実現される、内的持続の弛緩と外的延長の同一性にほかならない。

してみると、先の注記でベルクソン本人がいみじくも述べるとおり、彼の言う「延長と弛緩の関係」はプロティノスの発出の構図と、なるほど一定の相違を含みつつ似かよっている。一方でプロティノスは、二世界にまたがる世界靈魂という仲介者をたてながら、永遠にして不動の一なる知性界から空間と時間のうちで変化する多なる感性界への、減退による移行を描いた。他方でベルクソンは、やはり両極にまたがる脱緊張 \parallel 延長の概念を介して、たえず変化しつつも統一をなす極限的持続としての超意識から、幾何学的知性にも近しい、分割をはらむ空間へと弛緩を通じて移行する。知性界のうちなる永遠ないし不動を

出発点に、感性界のなかの時間および空間にそった変化を終点に置くプロティノスに対して、時間を統一の原理として規定しなおしたベルクソンは、高次の感性界とも言うべきその時間にそった変化を出発点に格あげるとともに、数学ならびに知性にせよ、仲介者を経た、一から多への減退もしくは弛緩による移行を語る点では、両者はたしかに共通するのである。

以上のように、プロティノスをめぐる諸講義のあと最初の主著において、相違を含みつつもプロティノスとある面では似かよったしかたで、ベルクソンは「持続」概念を空間と関係づける。この類似は、ベルクソンの意図するところであったのか。その点を探るうえで、『創造的進化』の七年後にエジンバラ大学で行なわれた「人格」についての一一の講演（一九一四年）の記録をみるのが有益である。

二・二 プロティノスの視点の反転―「人格」についての一一の講演

「哲学の中心的問題とみなしうる」「人格」を主題とした本講義で、ベルクソンは自身の見解を示すまえに、まずは先達の考えを、わけても、人格をめぐるのちのあらゆる思想の「源泉」とさえ言えるプロティノスのそれを検討する（M. 1051）。

ベルクソンのみるところでは、プロティノスの哲学は「第一に人格の理論である」（M. 1054）。というのも、彼は次のことき問題から根本的な着想を汲んだからである。

我々の人格はいかにして、一方で一もしくは単一でありつつ、他方で多であるか。「中略」彼「プロティノス」は、我々各人が「低いほうの本性において」多であり、「高いほうの本性において」単一なのだと想定した。換言すれば、彼は人格を本質的には一にして不可分な存在と考え、これが一種の衰弱ないし自己からの逸脱により、無際限な多性に流れ落ちるとしたのである。「中略」第二の場合、我々は分割へ傾き、ますます質料化する。第一の場合には反対に、我々はより精神的

になって、ますます高い統一へ向かう (M. 1055)。

思索の歩みの端緒で、いかにして人格を「一」と「多」の両方に与らせるかと頭を悩ませたプロティノスは、人格が本来的には「不可分」の「統一」でありながら、「衰弱」により「質料化」し「無制限な多性」に「分割」されると考えることでこの問題を解決した。ところで、この解決は「ことば」や「推論」を意味する「ロゴスの概念」に依拠していたとベルクソンは言う (M. 1056)。「ことば」とは「単一なる思考の、多における (しかも不十分な) 等価物」であり、「推論」とは「直観の、多における等価物」である。ベルクソンによれば、不可分の統一から無制限な多性への衰弱を、このように時間的展開にそって「巻物を解く」イメージで捉えたために、プロティノスは人格の二様態を区分する際、「権利上、我々は時間のそこにあるが、事实上は時間のなかで展開する」と考えるにいたった¹⁵⁾。

端緒で直面した問題にひとたび解決を与えるや、プロティノスは本来的人格のうえにさらなる統一を、そして衰弱した人格のしたにいっそうの分割を求めた。ベルクソンの考えでは、「神、知性的なもの、身体を伴った魂という三つの原理的なもの理論」、および「二者」からの「流出」と「回帰」の理論はその帰結である (M. 1057)。

こうして、プロティノス哲学全体の中核をなす人格理論を、すなわち、人格の本来的統一を時間のそこに置き、質料化し多に分割されたその衰弱態に時間を割りあてる人格理論を検討したあと、しかしながらベルクソンはここに、「内的時間をばらばらの諸瞬間に粉碎されたものとみなす根本的誤謬を指摘する (M. 1056)。そして、自身は講演の後半部で、「不可分な持続」という「…」考え」に訴えつつ (M. 1064)、プロティノスの「視点を反転」しようとする (M. 1058)。彼はまず、時間のうちにこそ人格の本来的統一を見出すべく、持続における「変化」の「不可分」性に注目し (M. 1062)、そこにみられる、「過去の全体を取りあつめながら未来を創造する、連続的な前方への運動」を「人格の本質的な本性」とする (M. 1065)。他方で彼は、その不可分な持続の「人為的」諸断片のほうに、むしろ「不動性」や「休止」を認める (M. 1061)。要するに、プロティノス

と同じく統一から多性への分散を語りながら、これとは対照的に、出発点の統一に時間を割りあて、その分割された諸断片を時間のそとに置くのである。

このように、「人格」についての一一の講演」でベルクソンは、時間のそとなる統一から時間のうちなる多性へ降る、プロティノス流の人格理論を意図的に反転して、変化しつつも不可分な持続から分割へと降りてゆく。とすれば、その七年前に『創造的進化』で自ら言及したプロティノスとの類似および差異も、同様に意図されたものであったろう。

二・三 以前の諸著作との比較―『意識に直接与えられたものについての試論』、『物質と記憶』、『形而上学序説』―

最後に、プロティノスの構図の意図的な反転によるこのような「持続」概念の深化を、ベルクソン哲学の通時的展開のなかに置きなおして、本節の考察を締めくくりたい。

一八八九年の処女作『意識に直接与えられたものについての試論』において最初に「持続」概念を掲げたとき、ベルクソンは「拡がりのないもの」と「拡がり」、「質」と「量」との不当な「混同」を戒めながら (D.I. 3)、持続と空間をきびしく峻別した。外的経験について空間を感性のア・プリオリな形式とするカントの所説に同意しながら (D.I. 62-64, 154)、ベルクソンは空間を「区々別々な諸項が配列される等質の環境」と規定し (D.I. 147)、そのうえで、区別もしくは分割の原理としてのこの空間を、「明確な区別を行い、数え、抽象し「…」話す」といった「人間の知性」のはたらきの準拠枠とみなす (D.I. 66)。しかし、内的経験の形式たる時間については、空間と同様にこれを諸項の配列される環境と考えるカントに異を唱え (*ibid.*)、諸要素の相互浸透、連携、内的有機化」によって特徴づけられる持続を時間の真のありようとする (D.I. 68) (9)。こうして彼は、「相互外在性なき継起」としての持続と「継起なき相互外在性」としての空間を (D.I. 72-73, 149)、あるいは統一の原理である持続と分割の原理である空間を切りはなした (17)。

ところが、一八九六年刊行の第二主著『物質と記憶』になると、ベルクソンは「拡がりのないものと拡がり、質と量との和

解」の道を模索しはじめ (M.M. 318)、そのなかで持続と空間の連絡の可能性がひらかれる。ベルクソンは第一に、「物質〔質料〕と十分に発達した精神とのあいだ」に「持続の緊張」の「無限の段階」を想定し (M.M. 355)、外界にも持続を認める。そして第二に、およそ感覚的なものを「延長」とよんで、これを「分割された拮がり」と純粹な非拮がりとの仲介者」とし (M.M. 374)、内界をもなんらか拮がりに与らせる。つまり、「緊張 (tension)」および「延長 (extension)」の二つの媒概念を介し (M.M. 318-319) (18)、一方で「精神」の「統一」から「分割可能な物質〔質料〕」へと降り、他方で後者から前者へ昇ろうとするのである (M.M. 317) (19)。

さらに、一九〇三年の論文「形而上学序説」では、持続の緊張という概念が本格的に体系化される。ベルクソンは色彩の「スペクトル」になぞらえながら、上限の「生ける永遠」から「物質性〔質料性〕の定義となろう」「純粹な反復」ないし「純粹な同質」にいたるまで、「緊張」の度合いに応じた諸々の持続の系列を語る (P.M. 1419) (20)。

このようにベルクソンは、処女作において最初に、知性とも親和的な分割の原理としての空間と統一の原理たる持続とをきびしく峻別したあと、世紀の変わり目をまたいで、緊張や延長といった媒概念を介し、両者の連絡の回復に努めるようになる。そして先述のとおり、一九〇七年には、一なる知性界と多なる感性界とにまたがって仲介者をたてるプロティノスの構図を利用しながら、ただし、知性を降格させて空間の側へひき寄せ、かわりに高次の感性界ともいべき持続を昇格させることでその視点を反転し、彼はついに、脱緊張Ⅱ延長を介した持続と空間との連絡を果たす。してみると、一九世紀末に確立されたプロティノス解釈を踏まえつつ、その視点の反転を経て持続と空間の連絡を実現した『創造的進化』は、それに先だつ一連の模索の延長線上にあった。ベルクソンは自身の概念装置にプロティノスの構図を適用することで、一〇年来の自らの問題意識にこたえたのである。

結語

第一節では、プロティノスをあつかう諸講義を年代順に検討し、一九世紀末にベルクソンが、一貫した視座から解釈をほかに確立するのを見た。初期の講義以来の着眼を最後には自覚的に前面へ押しだして、ベルクソンは結局、永遠の一なる知性界から時間と空間のうちで分割された多なる感性界へ、二世界にまたがる仲介者をたてながら移行しようとするプロティノスの努力を強調したのだった。

第二節では、そのようなプロティノス解釈がベルクソン自身の哲学にとっていかなる意義を有したかを考察した。一連の講義のち最初に刊行された名著『創造的進化』において、ベルクソンは自らも言及するとおり、相違を含みつつもプロティノスとある面では似かよったしかたで、「持続」概念を空間と関係づける。永遠なる知性界の統一から時間と空間のなかでの分割へ降るプロティノスに対し、おなじく両極にまたがって仲介者をたてながら、知性を空間の側にひき寄せる一方、統一の原理として規定しなおされた持続としての時間を出発点に移したベルクソンは、一なる持続から分割をはらんだ空間への移行を語る。のちの講演をあわせ読むならば、かかる類似と差異はプロティノスの視点の反転による意図的なものだったことが分かるし、また以前の諸著作と比較検討すれば、こうして実現された持続と空間の連絡が、それに先だつ一連の努力の集大成にほかならないこともみえてくる。

以上の点から、ベルクソンにとってプロティノス哲学は、持続を空間とあらためて関係づけるうえできわめて大きな意義を有したとの結論が得られる。ギリシャ哲学を悩ませた一と多の対立をかつてプロティノスが克服したように、ベルクソンはプロティノスの構図を、その視点を反転しつつ利用して、統一の原理である持続と分割の原理である空間との対立を克服したのである⁽¹⁾。

凡例

ベルクソン (Henri Bergson) からの引用は、以下の略号とともに頁数を本文中に示す。強調はすべて原著者、□ は引用者の補足である。
Œuvres, édition du centenaire (1959), P. U. F., 1991.

Essai sur les données immédiates de la conscience, 1889, (D.I.)

Matière et Mémoire, 1896, (M.M.)

L'évolution créatrice, 1907, (E.C.)

L'énergie spirituelle, 1919, (E.S.)

Les deux sources de la morale et de la religion, 1932, (D.S.)

La pensée et le mouvant, 1934, (P.M.)

Mélanges, André Robinet (éd.), P. U. F., 1972, (M.)

Cours I-IV, Henri Hude (éd.), P. U. F., 1990-2000, (C-I, C-II, C-III, C-IV.)

Correspondances, André Robinet (éd.), P. U. F., 2002, (C.)

註

(1) したがって、以下の本文中で言及されるプロティノス哲学は、あくまでベルクソンが解釈したかぎりのそれである。原典を参照しつつ、ベルクソンによる解釈の妥当性をあらためて問うことは、本稿の目的をこえる。

なお本稿は、拙稿「ベルクソンのフイヒテ観—ポスト・カントの哲学のあるべき姿をめぐって—」、『シエリング年報』一五号、二〇〇七年、六五—七四頁)と深く関連する。この論文は、ベルクソンがフイヒテ的シエマの反転を経てポスト・カントの哲学を構築したことを論じたのだが、そのなかで、彼がフイヒテとプロティノスの親近性に着目していたことも明らかになった。そこで、ここではベルクソンによるプロティノス哲学の受容を考察することにしたわけである。

(2) 一九一五年一〇月二八日付の H・M・カレン宛の手紙 (M.1192)。一九三四年一〇月三〇日の J・シェヴァリエに対する発言 (Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959, pp. 214-215)。一九三九年五月三十一日付の Ch・ウェルナー宛の手紙 (C:1626) 等を参照。

(3) 年代順に以下のとおり。Rose-Marie Mossé-Bastide, *Bergson et Plotin*, P.U.F., 1959, Emile Bréhier, "Images platoniciennes, images bergsoniennes," *Les études bergsoniennes II*, P.U.F., 1949, pp. 105-128, Lydie Adolphe, *La dialectique des images chez Bergson*, P.U.F., 1951, Jean Fouvret, "Mystique platonienne, mystique bergsonienne," *Les études bergsoniennes X*, P.U.F., 1973, pp. 5-71, 清水誠『ベルクソンの靈魂論』創文社、一九九九年。田中敏彦「プロティノスとベルクソン」、『ネオ・プラトニカⅡ—新プラトン主義の原型と水脈』昭和堂、二〇〇〇年、二九三—三〇六頁。土屋靖明「ベルクソンにおけるネオ・プラトニズム—美の(形)相と直観」、『新プラトン主義研究』三号、二〇〇四年、一〇三—一一八頁。なかでも、一なるものによる多の産出というモチーフをプロティノス哲学およびベルクソン哲学の根底に認めるモゼーバ

- ステイッドや (Mossé-Bastide, *op.cit.*, p. 402)、「精神的緊張の弛緩が物質的延長を創り出すという空間＝延長論」に両者の類似を、そして「時間の極限としての永遠が永遠の転落としての時間かという時間＝持続論」に差異を求める田中は (田中、前掲論文、三〇四～三〇五頁)、その点で本稿と関心を共有する。
- (4) 凡例に挙げた『ベルクソン講義録』全四巻のほかには、次のものがある。‘Cours 1885-1886.’ Jean Bardy, *Bergson professeur*. L’Harmattan, 1998, pp. 101-212. *Leçons clemontaises I-II*, Renzo Ragghianti(éd.), L’Harmattan, 2003-2006. ‘Histoire de l’idée de temp.’ *Annales bergsoniennes I*, Frédéric Worms(éd.), P.U.F., 2002, pp. 17-68. ‘Histoire de la mémoire et de la métaphysique.’ *Annales bergsoniennes II*, Frédéric Worms(éd.), P.U.F., 2004, pp. 17-149.
- (5) プロテイノスに関するベルクソンの講義を取りあげた先行研究は、年代順に以下のとおり。Pierre Magnard, ‘Bergson interprété de Plotin.’ *Bergson, naissance d’une philosophie, actes du colloque de Clermont-Ferrand, 1990*, pp. 111-119. 内藤純郎『ベルクソンと古代のスピリチュアリズム』、『フランス哲学・思想研究』六号、二〇〇一年、二一～五頁。土屋、前掲論文。内藤『ベルクソンとプロテイノス』、『ベルクソン読本』、法政大学出版局、二〇〇六年、一四～一三三頁。なお、註(二)に挙げた著作でモセ＝バステイッドは、自身の比較研究に着想を与えたものとして、ベルクソンが一九〇一～一九〇二年に行なった(当時も現在も未刊行である)『エンネアス』第六卷九章をめぐる講義の記録に触れている (Mossé-Bastide, *op.cit.*, pp. 9-13、ただし、モセ＝バステイッド自身はこの講義を臆講していない)。
- (6) このほか、ベルクソンはコレージュ・ド・フランスにおいて、「プロテイノスの心理学」と題された講義 (一八九七～一八九八年) と、『エンネアス』第四卷および『エンネアス』第六卷九章の解説 (一八九七～一八九八年、一九〇一～一九〇二年) を行なったようであるが (M. 413, 512-513)、これらの記録はいまのところ公にされていない。ただ、このうち「プロテイノスの心理学」は、シュヴァリエの証言をみる限り (Chevalier, *op.cit.*, p. 265)、我々が(二)で検討する、これと同時期の講義「プロテイノスについての講義」に類似のものだったろうと推測される。
- (7) 諸々のイデアの座としての知性が多重の二者ともよばれ、その一性が強調されるのは、おそらく、プロテイノス哲学における諸イデアの関係を、ベルクソンがモナド論的なモデルによって理解しているからである。たとえば、『ギリシャ哲学』や『プロテイノスについての講義』でベルクソンは、各イデアがそれぞれに他のすべてのイデアを表象すると言いつつ、そうやって相互に融合した諸イデアの全体を知性とみなしている (C-IV, 31, 66, 68, 76, 77, 141-142)。また、彼は『創造的進化』でも、プロテイノス流の「知性的なもの」と「ライプニッツのモナド」との親近性に通じがりに言及しつつ、さらにはそこに注記を付して、かつて両者の親近性を本格的に論じたらしい、コレージュ・ド・フランスにおける一八九七～一八九八年の講義「プロテイノスの心理学」を挙げている (E.C. 793-794)。
- (8) ベルクソンの念頭にあるのは、『国家』第一〇巻、『バイドン』、『バイドロス』、『プロタゴラス』そしてなかんずく、「不可分な本質」と「分割可能な本質」の「混交」による靈魂の形成が語られる『テイマイオス』である (C-IV, 39, 70)。
- (9) 内包された発出と回帰をプラトン哲学のうちに認める(二)での主張は、先の『ギリシャ哲学』の記述→プラトンが統一的な神と諸事物とをおり合わせられなかったとする記述→と相容れないようにもみえる。しかし、いまはこの点には深入りしない。
- (10) 『ベルクソン講義録』の編者ユードが適切にも注釈するように (C-IV, 265-266)、ベルクソンは(二)で、『エンネアス』第三卷五章「エロスについて」九節の次の一節に依拠しているとみられる。「物語(ミュートス)は、それが真に物語の名に値するものにならうとすれば、

話の内容を時間的に区別しなければならぬし、諸存在の多くが同じところに同時に存在しているばあいでも、そこに序列や力のちがいがあばあいに、これを別々に分けなければならぬ。「中略」そして物語は、最善をつくして教え終えた後ならば、これを理解した者に、その区別したものを一つにまとめることを許すのである」『プロテイノス全集』第二巻、水地宗明・田之頭安彦訳、中央公論社、一九八七年、三〇一頁）。

- (11) 一にして不可分な知性界の永遠に対し、感性界には時間および空間を割りあてつつ、これらを分割と多性の原理となすプロテイノスの思想については、ベルクソンはとくに『エネアス』第三巻第七章「永遠と時間について」の参照を促している（C-IV.40）。
- (12) ベルクソンのかかるプロテイノス解釈は、同時代的な環境のなかでいかなる程度の独自性もしくは一般性を有したのか。現時点ではこの点を追求する用意がない。ただ一例を挙げれば、ベルクソンの一代あとと哲学史家であり、『エネアス』全巻の対訳（一九二四—一九三八年）をもしたことで知られるエミール・ブレイエ（一八七六—一九五二年）は、一九三二年の書物でプロテイノスの世界靈魂に言及して、これを、知性界と感性界の両世界にはたらきかける仲介者としている（Emile Bréhier, *Histoire de la philosophie*, Tome I-2, Félix Alcan, 1931, p.459. ちなみに、ブレイエはソルボンヌの学生時代、ベルクソンが一九七—一八九八年にコレージュ・ド・フランクスで行なった『エネアス』第四巻の解説を聴講し、おおいに感銘を受けたことをのちに明かしている。 Cf. Bréhier, “Images platoniques, images bergsoniennes,” *op.cit.*, pp. 107-108.）このことから、ベルクソンのプロテイノス解釈もさほど特異なものでなかったことが推察される。しかしこの解釈は、あとでみるように、彼のその後の思想的進展と照らしあわせるとき、非常に興味深いものである。
- (13) 先行の諸著作における概念規定との異同については、後述の二—三を参照されたい。
- (14) 空間と知性の親和性については、空間を知性の準拠棒とみなす次の記述も併せて参照されたい。「知覚されるのは色のついた抵抗ある拡がりであり、それは現実的な諸物体の輪郭が描く線によって、あるいは、その物体を構成する現実的な要素的諸部分の輪郭が描く線によって、分割されている。ところが、この素材に働きかける我々の力を、すなわち好きなようにそれを解体し、再構成する我々の能力を思いうかべるとき、我々はこれら可能な解体や再構築を、ひとまとめに現実的な拡がりの背後に、その下に横たわる等質、空虚で無差別な空間のかたちで投影する。それゆえ、この空間はなによりも、諸事物に対する我々の可能な行動の図式である[…].」【中略】それは、人間の知性の製作の傾向を象徴する表象なのだ」（EC, 628）。
- (15) 統一から多性へ降るプロテイノスの構図にベルクソンの語をあてるのは、実はこれがはじめてではない。前節で最後に検討した「プロテイノスについての講義」においても、永遠の知性界から時間および空間のうちなる感性界へ降ったアイデアがときにロゴスとよびかえられるし（C-IV.30, 44, 66）、「本節冒頭でみた、自身とプロテイノスとの関係に言及する『創造的進化』の注記のなかでも、引用文の直前の箇所でロゴスの語が用いられている（EC, 673）。
- (16) 持続における諸要素の相互浸透という論点は、ときに、各要素がそれぞれに他のすべての要素を表象する、モナド論的なモデルと合流する（DI, 66, 68, 108, 109）。
- (17) ベルクソンは持続の空間化を批判するのみならず（DI, 51, 66, 68-69, 74, 81, 83-85, 92, 103, 126, 130, 144-145, 148-156）、「外界に持続を認めず」に「緊張」を（DI, 75, 77, 80, 137-138, 148-149）。
- (18) しかしながら、延長を脱緊張（ex-tension）すなわち緊張の弛緩とみるのちの『創造的進化』と異なり、『物質と記憶』では、緊張と延

長の両概念は相互に関係づけられない。

- (19) ただし、ベルクソンは精神と物質（質料）とをあゆみ寄らせる際、物質（質料）を分割の原理たる等質的空間とは区別している（M.M. 318, 323, 341, 343-347, 351, 354, 374）。それゆえ(19)では、のちの『創造的進化』と異なり、持続の弛緩の極限に空間そのものが位置づけられるわけではなく、持続と空間の連絡は、その可能性をひらかれながらもいまだ果たされていない。
- (20) 弛緩の極限としての物質性（質料性）を、空間概念にも通ずる純粹な等質によって定義する点で、本論文は先の『物質と記憶』に比して、持続と空間とをめぐる『創造的進化』のシエマにいつそう近づいているといえる。
- (21) ベルクソン哲学において、このようにプロティノスの発出が応用されたとすれば、回帰の側面についてはどうだろうか。この点については、それが不可避的に巻きこむであろう価値論的問題とあわせ、いずれ稿をあらためて考察したい。